

前期博士課程

総合福祉科学コース

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 前期
【科目名】 ソーシャルワーク特論
【英語表記】 Advanced Theory and Practice of Social Work
【科目ナンバリング】 HFSWG6501
【担当教員】 岩間 伸之
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

ソーシャルワークの基本構造及びソーシャルワーク実践の根拠となる「価値」について明らかにするとともに近年のソーシャルワーク実践の顕著な動向である「地域を基盤としたソーシャルワーク」の背景及びその基本的性格について理解を深める。

前半は、ソーシャルワークの価値の構造と内容について明らかにする。「価値」とは「援助を方向づける理念・思想・哲学」のことであり、実践を支える根拠となるものである。後半は、地域を基盤としたソーシャルワークの理念、特質、機能について明らかにする。地域を基盤としたソーシャルワークは、本人を中心に据えた援助システムを構築すること、その援助システムに市民や地域住民が深く関与するという点に特質がある。個別支援と地域支援をつなぎ、地域福祉の推進に直結するものである。さらに、その基礎理論として位置づけられる「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」に関する文献をとおして、現代ソーシャルワーク理論の特質を学ぶ。

【授業の到達目標】

- ① ソーシャルワークの基本構造及びソーシャルワーク実践の根拠となる「価値」について理解する。
- ② ソーシャルワーク実践の顕著な動向である「地域を基盤としたソーシャルワーク」の背景及び理念・特質・機能について理解する。

【授業内容・授業計画】

- 1：オリエンテーション（講義の目的と評価方法）
- 2：ソーシャルワークを取り巻く状況
- 3：ソーシャルワークの全体像
- 4：ソーシャルワークの価値の全体像と意義
- 5：中核的価値と根源的価値
- 6：派生的価値（1）
- 7：派生的価値（2）
- 8：地域を基盤としたソーシャルワークの背景
- 9：地域を基盤としたソーシャルワークの理念と特質
- 10：地域を基盤としたソーシャルワークの機能（1）
- 11：地域を基盤としたソーシャルワークの機能（2）
- 12：地域を基盤としたソーシャルワークと総合相談の展開
- 13：基礎理論としてのジェネラリスト・ソーシャルワーク（1）
- 14：基礎理論としてのジェネラリスト・ソーシャルワーク（2）
- 15：まとめ

【事前・事後学習の内容】

各講義の最後に各自が取り組むべき事後学習と事前学習の内容についてアナウンスする。

【評価方法】

次の配分で評価する。レポート（50%）②発表内容（20%、③参加態度（15%）④出席（15%）

【教材】

岩間伸之『地域を基盤としたソーシャルワークー本人主体の援助論ー』有斐閣, 2017 年。

（参考文献）

- ① 岩間伸之・原田正樹『地域福祉援助をつかむ』有斐閣, 2012 年。
- ② ルイズ・ジョンソン他著／山辺朗子・岩間伸之共訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房, 2004 年。
- ③ その他、適宜配付する。

【受講生へのコメント】

受講時点で、社会福祉及びソーシャルワークに関する基礎的な知識を有していることが求められる。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 社会福祉学特論
【英語表記】 Advanced Theory of Social Welfare
【科目ナンバリング】 HFSWG6502
【担当教員】 岩間 伸之
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

「社会福祉学とは何か」について、国内外の基本文献をもとに理解を深める。社会福祉の歴史、対象、構造、価値、実施システム等、社会福祉をめぐる諸相から検討を深める。その過程をとおして、現代の「社会福祉学」の構築に向け、その基本的性格及び構成要素について検討する。また、社会福祉をめぐる最近の政策的及び実践的動向について、そのトピックスを取り上げ、議論を深める。

【授業の到達目標】

社会福祉の歴史、対象、構造、価値、実施システム等、社会福祉の諸相から、現代の「社会福祉学」の基本的性格及び構成要素を理解する。

【授業内容・授業計画】

- 1：オリエンテーション（講義の目的と評価方法）
- 2：社会福祉の基本構造と課題① ー歴史的考察ー
- 3：社会福祉の基本構造と課題② ー施策的動向ー
- 4：社会福祉の基本構造と課題③ ー現代の福祉課題ー
- 5～11：献題①～⑦社会福祉学の諸側面ー
- 12：社会福祉学の構成要素①
- 13：社会福祉学の構成要素②
- 14：社会福祉学の構成要素③
- 15：まとめ

【事前・事後学習の内容】

各講義の最後に各自が取り組むべき事後学習と事前学習の内容についてアナウンスする。

【評価方法】

次の配分で評価する。

- ① レポート（50%）、②発表内容（20%）、③参加態度（15%）、④出席（15%）

【教材】

- ① 岩崎晋也著／岩田正美監修『社会福祉とはなにかー理論と展開（リーディングス日本の社会福祉）』日本図書センター、2011年。
 - ② 白澤政和・岩間伸之著編著／岩田正美監修『ソーシャルワークとはなにか(リーディングス日本の社会福祉)』日本図書センター、2011年。
- ※その他、適宜配付する。

【受講生へのコメント】

受講時点で、社会福祉及びソーシャルワークに関する基礎的な知識を有していることが求められる。また、「ソーシャルワーク特論」を履修済みであることが望ましい。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 先端ケア学特論
【英語表記】 Advanced Interdisciplinary Care Science
【科目ナンバリング】 HFSWG6503
【担当教員】 岡田 進一
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

さまざまなケアに関する実践、制度、政策に関する課題について検討を行う。この講義では、具体的な事例や具体的な制度・政策を分析対象とし、ケアに関する課題の整理と提言についての検討を行う。また、ケアに関して、どのような専門的技法があるのかを解説する。そして、講義の中で事例演習を行い、知識の応用力の向上を目指す。

【授業の到達目標】

1. ケアに関する現在の課題について説明することができる。
2. ケアマネジメントについて説明することができる。
3. ケアの専門的技法を説明することができる。
4. ケアに関連する政策を分析することができる。

【授業内容・授業計画】

1. ケアの定義とケアに関する政策分析 (1 回)
2. ケアに対比するニーズ論と政策的な議論 (2 回)
3. ケアマネジメント論 (3 回)
4. ケアマネジメント事例研究 (4 回)
5. 認知症ケアとケアマネジメント (1 回)
6. ケアに関する政策的な議論 (2 回)
7. 日本におけるケアのあり方 (2 回)

【事前・事後学習の内容】

講義で説明を行う。

【評価方法】

レポート 2 回 1 レポート・・・50 点
50 点×2 回=100 点

【教材】

適宜、プリントを配布する。

【受講生へのコメント】

事例検討、施策・制度分析などに関するディスカッションを中心とするので、大学院生の主体性と自主性を重んじたい。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 福祉科学研究特論
【英語表記】 Advanced Research and Statistical Methods in Social Welfare
【科目ナンバリング】 HFSWG6504
【担当教員】 岡田 進一
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

福祉科学研究論特論では、福祉分野でのエビデンス・ベースの研究を進めていくための基本的な情報提供を行う。具体的には、量的・質的研究の方法論、統計手法（t 検定、一元配置の分散分析、因子分析、重回帰分析など）、質問紙作成法などの情報提供を行う。また、実際のデータを用いたシミュレーション演習でSPSSのプログラムの活用方法の指導を行う。

【授業の到達目標】

1. 量的・質的研究の方法について説明することができる。
2. 統計学を用いた分析方法について説明することができる。
3. SPSS を用いてデータ分析を行うことができる。

【授業内容・授業計画】

- | | |
|-------------------|-------|
| 1. オリエンテーション | (1 回) |
| 2. 調査の考え方 | (2 回) |
| 3. 調査設計 | (3 回) |
| 4. 統計解析法 | (5 回) |
| 5. 質的研究法 | (3 回) |
| 6. 論文の書き方・学会発表の方法 | (1 回) |

【事前・事後学習の内容】

講義で説明を行う。

【評価方法】

試験 1 回 100 点

【教材】

適宜、プリントを配布する。

【受講生へのコメント】

社会福祉学分野の研究においては、研究手法の精緻さが重視されつつある。福祉領域の大学院生が積極的に参加することを望む。

【開講年度・学期】 2017 年度 ・ a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 福祉政策学特論
【英語表記】 Advanced Social Policy
【科目ナンバリング】 HFSWG6505
【担当教員】 所 道彦
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

本講義では、福祉国家の体系と社会的機能を整理するとともに、ソーシャルワークとソーシャルポリシーとの対比を通じて、日本における福祉政策学の位置と役割を議論する。また、日本の福祉政策の現状を分析する。人口動態、家族、世帯、雇用など社会経済状況の変化、市場、規制、成長と分配をめぐる政策動向を踏まえ、これからの生活保障のあり方をソーシャルポリシーの視点から議論する。

【授業の到達目標】

福祉政策の体系と機能について理解し、履修者の研究テーマと関連させて、その知識を活用できるレベルへの到達をめざす。

【授業内容・授業計画】

1. 社会福祉学におけるマクロ領域
2. 学説史の検討
3. 福祉国家の構成：「家族」「市場」「国家」
4. 福祉政策：「家族政策」「雇用政策」「社会保障政策」
5. 福祉国家の登場と展開
6. 福祉国家の再編と「日本型福祉社会論」
7. 少子高齢化・家族の多様化
8. 雇用の変化
9. 所得保障政策の現状
10. 地域包括ケア政策の現状
11. 子どもの貧困問題
12. 総括

【事前・事後学習の内容】

事前学習として文献講読および授業での報告準備、事後学習として小レポート等の提出が求められる。

【評価方法】

レポート

【教材】

初回到文献リストを提示する。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 国際比較研究特論
【英語表記】 Advanced Comparative Study of Welfare Policy
【科目ナンバリング】 HFSWG6506
【担当教員】 所 道彦
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

日本の福祉政策の現状と課題を評価する方法の一つとして国際比較がある。1990年代以降、発展してきた福祉国家の類型化や動態把握をめぐる研究の現状とその問題点、アジア諸国も含めた新たな比較研究の課題を概観する。続いて、諸外国との比較を通じて、日本の社会福祉システムの残余的特徴と今後の課題について議論する。

【授業の到達目標】

各国の福祉制度・政策の特徴と課題について理解するとともに、比較を通じて日本の問題点を分析できるレベルへの到達を目指す。

【授業内容・授業計画】

1. 福祉政策の相対化と国際比較
2. 国際比較研究の展開①
3. 国際比較研究の展開②
4. 国際比較研究の手法
5. 社会保障政策の国際比較：社会扶助と雇用政策の関係
6. 家族政策の国際比較
7. 子どもの貧困対策の国際比較
8. 住宅政策の国際比較
9. 日本型福祉システムの特徴と問題点
10. 各国の福祉政策の動向と今後の課題

【事前・事後学習の内容】

事前学習として英語文献の講読と報告の準備が必要となる。授業では、報告内容についての議論を行う。また、事後学習として小レポート等の提出が求められる。

【評価方法】

レポート

【教材】

基本的に外国文献（英語）を用いる。初回に文献リストを提示する。

【受講生へのコメント】

事前学習をベースにディスカッションを行います。授業の準備が重要になります。

【開講年度・学期】 2017 年度・a（昼間クラス）前期 b（夜間クラス）前期
【科目名】 社会開発学特論 I
【英語表記】 Advanced Social Development I
【科目ナンバリング】 HFSWG6507
【担当教員】 堀口 正
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可 （平成 28 年度以降入学生対象）

【科目の主題】

社会開発学という学問を勉強したい学生のために、——たとえば国内外の過疎化問題、地域活性化、グローバルなビジネスや開発援助など——、その基本的な内容や理論を紹介するのが本講義の目的です。

【授業の到達目標】

当該科目の基礎的な内容の習得を目標とし、そのため外国語能力（英語・中国語など）、関連論文の読解能力、フィールド調査実施能力の向上をめざします。

【授業内容・授業計画】

第 1 回：ガイダンス
第 2 回から第 10 回：各分野に関連する論文・書籍の紹介と分析
第 11 回から第 14 回：受講生の自主課題・修士論文研究計画の発表
第 15 回：まとめ

【事前・事後学習の内容】

語学の勉強やテキストの予習復習だけでなく、関連の書籍文献を読む等の課題をだします。

【評価方法】

出席、報告・発表などを通じて評価します。

【教材】

佐藤寛ほか、開発社会学を学ぶための 60 冊（明石書店）など

【受講生へのコメント】

日本や諸外国（途上国も）の格差問題、地域問題に関心のある学生といっしょに書籍や文献を通じて、それら解決方法を学んでいけたらと考えています。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 社会開発学特論Ⅱ
【英語表記】 Advanced Social DevelopmentⅡ
【科目ナンバリング】 HFSWG6508
【担当教員】 堀口 正
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可 (平成 28 年度以降入学生対象)

【科目の主題】

社会開発学という学問を勉強したい学生のために、——たとえば国内外の過疎化問題、地域活性化、グローバルなビジネスや開発援助など——、その基本的な内容や理論を把握しているとの前提(同特論Ⅰ)にたち、実践的にその事項にアプローチする方法を学ぶことが本講義の目的です。

【授業の到達目標】

当該科目の具体的な内容の習得を目標とし、そのため外国語能力(英語・中国語など)、関連論文の読解能力、フィールド調査・統計分析などの実施能力の向上をめざします。

【授業内容・授業計画】

- 第 1 回：ガイダンス
- 第 2 回から第 9 回：各分野の具体事例の紹介
- 第 10 回から第 14 回：受講生の実践事例の紹介と検討
- 第 15 回：まとめ

【事前・事後学習の内容】

現地調査の実施、修士論文の作成に向けて、その妥当性や問題点を検討するつもりです。

【評価方法】

出席・報告・発表などを通じて評価します。

【教材】

授業中に紹介します。

【受講生へのコメント】

これから、国際協力やまちづくりの現場で実践活動を行いたいと考えている方とっしょに勉強できればと考えています。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 前期
【科目名】 福祉システム学特論
【英語表記】 Advanced Studies of Welfare System
【科目ナンバリング】 HFSWG6509
【担当教員】 大西 次郎
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可 (平成 28 年度以降入学生対象)

【科目の主題】

福祉システムは保健医療の制度と深く関わっており、雇用、労働、教育、住宅等へ広がる全体像を把握することは容易でない。その理由にはシステム自体の複雑さに加え、地域ごとに異なる実態や、繰り返される改正があげられよう。加えて専門職としての対人援助の観点からも、各実践領域に応じた被援助者像に特化した形で折々の制度へ相対する機会が多いため、ライフステージを通じた福祉システムの姿を実感する機会が乏しいといえよう。

一方、私たちの臨床活動はシステムから影響を受け、時には制約すら覚えることもある。しかし、多くの福祉システムの存在には相応の背景がある。それらへの認識を介して、利用が中心の「制度」とどまらず、社会問題を解明し未来を切り開く「政策」の視座が生まれよう。

本授業では、被援助者における生老病死のライフステージごとに、これまでの / これからの福祉システムを取り上げて、各々の意味を捉えつつ共生社会の実現に向けた方策を考える。

【授業の到達目標】

社会科学の研究には過去の蓄積を的確に振り返り、その現代的意義につき明らかにしていく側面と、従前の論考を超えた固有の主張を提起し、実態の把握や理論的な検討を加えていく側面とのバランスが求められる。福祉システム学特論においては前者への習熟を目標とし、社会的要請の高いテーマに対する、出自に拘泥しない多角的な見地を身に付ける。

【授業内容・授業計画】

予備討議、中間討議、総括討議 (3 回) : 受講生と教員による、本授業の方向性の確認
死の福祉システム (3 回) : 高齢者施設の看取り、スピリチュアルケア、Engaged Buddhism (例)
病の福祉システム (3 回) : 臓器移植コーディネーター、ハンセン病、スモン病 (例)
老の福祉システム (3 回) : 介護の社会化、サービス付き高齢者住宅、リビングウィル (例)
生の福祉システム (3 回) : 遺伝カウンセリング、新出生前診断、ベーシックインカム (例)

【事前・事後学習の内容】

学生の研究課題に沿ったテーマを設定し、幅広い立場からお互いの問題意識を検証していく。受講による教育成果を高めるため、教員ないし話題提供者が指示・作成した資料を事前に精査し、主体的な議論や新たな視点の提供ができるよう準備しておくことが望ましい。

講義内容に関し十分に理解できない事項があった場合は、次の授業までにそれらにつき質し、かつ調べることで既知の情報と未知の領域とを自らのなかではっきり区分しておく。

【評価方法】

レポート (1 回) と、授業への積極的参加度により評価する。

【教材】

受講生の関心を考慮のうえ、授業のなかで適宜指示ないし配布する。

【受講生へのコメント】

自らの問題意識を吟味のうえ、第 1 回目の授業に臨んでください。

【開講年度・学期】 2017 年度 ・ a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 前期
【科目名】 精神保健福祉学特論
【英語表記】 Advanced Studies of Mental Health and Social Welfare
【科目ナンバリング】 HFSWG6510
【担当教員】 大西 次郎
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可 (平成 28 年度以降入学生対象)

【科目の主題】

社会福祉学はソーシャルポリシーに対し、ソーシャルワークへ重点を置くことで内的な固有性を確立した。これに比し精神科ソーシャルワークは、経済学を基盤とした社会体制や、雇用・労働・貧困問題に着目したソーシャルポリシーというより、社会防衛のための精神科病院とそれを期待した地域社会の構造に規定され、医療との学際で端を発する精神障害者のソーシャルポリシーへ対峙してきた史実があり、それらから距離を取ることができない特質を持つ。

従って、ソーシャルポリシーおよび学際を主たる軸とした、社会福祉学とならぶ学術の体系(精神保健福祉学) が存立するという備えが認められ、しかもその体系は精神科ソーシャルワーク実践の理論化だけにとどまらない、大きな広がりを持つ可能性がある。

本授業では、いまだ草創期にあると思われる精神保健福祉学の理論的枠組みを、受講生とともに討議し構築していく。新たなディシプリンの誕生と形成の過程を目撃(参画)せよ!

【授業の到達目標】

社会科学の研究には過去の蓄積を的確に振り返り、その現代的意義につき明らかにしていく側面と、従前の論考を超えた固有の主張を提起し、実態の把握や理論的な検討を加えていく側面とのバランスが求められる。精神保健福祉学特論においては後者への習熟を目標とし、社会の動向を鋭敏に把握のうえ、斬新な発想でその核心を突く姿勢を身に付ける。

【授業内容・授業計画】

予備討議、中間討議、総括討議(3回)：受講生と教員による、本授業の方向性の確認
精神保健福祉を鍵概念とした研究の萌芽性(3回)：パラダイムとソーシャルポリシー
精神保健福祉以前 / 以降のソーシャルワーク実践(3回 / 3回)：医療化と国家資格制度
社会福祉学の現在と照応した精神保健福祉学(3回)：学際における多職種・当事者協働

【事前・事後学習の内容】

学生の研究課題を主に、教材を参考として、もっぱらソーシャルポリシーの視点から各々の問題意識を検証していく。受講による教育成果を高めるため、教員ないし話題提供者が指示・作成した資料を事前に精査し、主体的な議論ができるよう準備しておくことが望ましい。

講義内容に関し十分に理解できない事項があった場合は、次の授業までにそれらにつき質し、かつ調べることで既知の情報と未知の領域とを自らのなかではっきり区分しておく。

【評価方法】

レポート(1回)と、授業への積極的参加度により評価する。

【教材】

大西次郎(2015)『精神保健福祉学の構築』中央法規(必ずしも購入の要はない)

【受講生へのコメント】

自らの問題意識に囚われず、第1回目の授業に臨んでください。

【開講年度・学期】 2017 年度 ・ a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
(隔年開講 2017 年度開講)

【科目名】 ワーク・ライフ・バランス政策特論 I

【英語表記】 Advanced Policy Studies of Work and Life Balance I

【科目ナンバリング】 HFSWG6511

【担当教員】 服部 良子

【授業形態】 講義

【単位数】 2 単位

【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

従来の社会経済分析はペイド・ワークにのみもとづき理論構築されたが、本論では、アンペイド・ワークの観点も導入し、市場経済と福祉国家が相互に補完しあいながら発展してきたプロセスとワーク・ライフ・バランス政策の形成と発展を分析し考察する。その際、多様なアンペイド・ワークの実態とその担い手の変遷について経済の発展段階、ジェンダー問題、国際比較等を踏まえて講義する。なお実際に現代日本の仕事のキャリア形成におけるワーク・ライフ・バランス政策関連課題を考察する。その課題について有効な政策構築を探るために、キャリア形成を実現したワーカー当事者を招き、そのケース紹介とケース検討機会をもうける。

【授業の到達目標】

ペイド・ワークとアンペイド・ワークの関係性を歴史的経済学的特質として理解する。その理解に基づきワーク・ライフ・バランス政策分析視点を獲得する。

【授業内容・授業計画】

第 1 講	イントロダクション
第 2 講	アンペイド・ワークとワーク・ライフ・バランス政策
第 3 講	アンペイド・ワークとしての育児：少子化対策の観点から検討
第 4 講	アンペイド・ワークとしての介護：労働政策の観点から検討
第 5 講	欧米のアンペイド・ワーク認識とワーク・ライフ・バランス政策
第 6～14 講	組織のなかのワーク・ライフ・バランス：ケース研究
第 15 講	総括

【事前・事後学習の内容】

指定の参考文献を読むことを事前学習とする。受講後は、さらに関連文献を自ら調べて読み進むこと。

【評価方法】

レポートおよび出席・報告内容などの講義参加の総合評価による。

【教材】

・テキストおよび参考書は、開講時に指示する。

【受講生へのコメント】

変化が急激な領域であるので、内外の政策変化に注意することをこころがけてほしい。
なお、諸般の状況変化に応じて、講義内容・進行は変更される場合がある。

【開講年度・学期】 2018 年度 ・ a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 前期
(隔年開講 2017 年度休講)

【科目名】 ワーク・ライフ・バランス政策特論Ⅱ
【英語表記】 Advanced Policy Studies of Work and Life Balance Ⅱ
【科目ナンバリング】 HFSWG6512
【担当教員】 服部 良子
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

ワーク・ライフ・バランスをめぐる政策研究を行う。日本のワーク・ライフ・バランス政策を検証する観点から講義する。近年、少子化対策の主要な政策としてワーク・ライフ・バランスが重視され始めている。その歴史的経緯と意義を国際比較もふまえて確認したうえで、実際に現代日本の仕事のキャリア形成におけるワーク・ライフ・バランス関連課題を考察する。その有効な政策構築を探るために、企業、自治体など組織および起業するなかでキャリア形成を実現したワーカー当事者を招き、そのケース紹介とケース検討を行う。

【授業の到達目標】

ワーク・ライフ・バランス政策の歴史的経済学的特質を理解する。その理解に基づきワーク・ライフ・バランス政策分析視点を獲得する。

【授業内容・授業計画】

第 1 講	イントロダクション
第 2 講	ワーク・ライフ・バランスとキャリア形成
第 3～5 講	ワーク・ライフ・バランス政策：日本的雇用変遷の観点から検討
第 6～12 講	組織のなかのワーク・ライフ・バランス：ケース研究
第 13 講	起業とワーク・ライフ・バランス：ケース研究
第 14 講	ワーク・ライフ・バランス視点のキャリア形成と支援政策化
第 15 講	総括

【事前・事後学習の内容】

指定の参考文献を読むことを事前学習とする。受講後は、さらに関連文献を自ら調べて読み進むこと。

【評価方法】

レポートおよび出席・報告内容などの講義参加の総合評価による。

【教材】

・テキストおよび参考書は、開講時に指示する。

【受講生へのコメント】

変化が急激な領域であるので、内外の政策変化に注意することをこころがけてほしい。
なお、諸般の状況変化に応じて、講義内容・進行は変更される場合がある。

【備考】

(ケース紹介とケース検討)

・ワーカー当事者としてゲスト講師を適宜招聘する。ゲスト講師特別講義の詳細日程については講義開始時点配付する。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 前期
(隔年開講 2017 年度開講)

【科目名】 居住福祉学特論
【英語表記】 Advanced Housing for Life and Well-Being
【科目ナンバリング】 HFSWG6513
【担当教員】 野村 恭代
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

「住居は福祉の基盤である」という理念に基づき、「居住の権利」や「居住福祉」について検討する。また、社会におけるさまざまな居住をめぐる課題の実態について、人権、生活、福祉、健康、文化、社会環境等の視点から、居住福祉政策、まちづくりの実践等について考察を深める。

【授業の到達目標】

- ・「居住の権利」が意味するものについて、自身の考察に基づいて述べることができる。
- ・「住まい」を支援するとはどのようなことであるのかについて、多角的な視点から理解することができる。
- ・居住福祉政策やまちづくりについて、具体的に理解することができる。

【授業内容・授業計画】

1. 居住福祉の理念と価値
2. 居住福祉の国際的動向
3. 「住まい」とはなにか
4. 居住をめぐる福祉的課題
5. 居住福祉政策とまちづくり

【事前・事後学習の内容】

各回、課題について指示し、提出した課題に基づき報告を行う。

【評価方法】

課題発表とレポート及び出席状況の総合評価

【教材】

早川和男著『居住福祉』岩波新書、1997

【受講生へのコメント】

ディスカッションへの積極的参加を期待します。

【開講年度・学期】 2018 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 前期
(隔年開講 2017 年度休講)

【科目名】 地域福祉特論
【英語表記】 Advanced Community Welfare
【科目ナンバリング】 HFSWG6514
【担当教員】 野村 恭代
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

社会構造の変化に伴い、地域社会における生活課題は多岐に渡り、そして複雑化している。人々が生活する「地域」を中心とした福祉課題について、それぞれの地域における社会文化の違いに着目し、住民の意識を形成する社会文化的要因が地域に与える影響について考察する。加えて、地域福祉の理論を構成する価値や実践を学ぶとともに、地域福祉理論への理解を深める。

【授業の到達目標】

- ・ 地域における福祉課題について、地域の文化等の背景に着目しながら考察することができる。
- ・ 地域ごとの社会文化的要因が地域の課題に与える影響について、考察することができる。
- ・ 地域福祉の理論を体系的に理解することができる。

【授業内容・授業計画】

1. 地域福祉の理念と価値
2. 日本における「地域福祉研究」
3. 諸外国における「地域福祉研究」
4. 地域における福祉課題
5. リスクと地域摩擦
6. 地域福祉の追求と展望

【事前・事後学習の内容】

各回、課題について指示し、提出した課題に基づき報告を行う。

【評価方法】

課題発表とレポート及び出席状況の総合評価

【教材】

開講時に指示する。

【受講生へのコメント】

ディスカッションへの積極的参加を期待します。

【開講年度・学期】 2017年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
(隔年開講 2017年度開講)

【科目名】 家族社会学特論
【英語表記】 Advanced Family Sociology
【科目ナンバリング】 HFSWG6515
【担当教員】 松木 洋人
【授業形態】 講義、演習
【単位数】 2単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

日本社会における家族の現状および家族社会学の研究動向について理解を深めることを目的とする。現代家族のありようについて知識を獲得することと家族を社会的に分析する視点を身につけることは、生活科学の研究を進めるうえで重要である。具体的には、国内外における近年の重要な研究論文を対象として、受講者による報告・ディスカッションを行うことによって、“いま家族に何が起きているのか”、そして、“家族社会学とはどのような学問なのか”を検討していく。

【授業の到達目標】

日本社会における家族の現状と家族社会学の研究動向について概括的な理解を得ること。

【授業内容・授業計画】

1. オリエンテーション (授業の目的と進め方の確認) 1回
2. 講義：家族の現在と家族社会学の歴史 2回
3. 文献購読1：戦後日本社会における家族モデルの形成と解体 4回
4. 文献購読2：社会的アプローチからみる日本の家族 4回
5. 文献購読3：家族社会学の研究動向 4回

【事前・事後学習の内容】

毎回の授業で、指定文献の読解など、予習・復習課題を指示する。

【評価方法】

授業への参加・貢献度 (50%)、期末レポート (50%)

【教材】

受講者の関心も考慮したうえで、授業の中で適宜、指示する。

【受講生へのコメント】

文献の輪読を中心に展開される授業なので、事前に対象文献を精読することと積極的にディスカッションに参加することが必要となります。

【開講年度・学期】 2018年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
(隔年開講 2017年度休講)

【科目名】 質的研究法特論
【英語表記】 Advanced Qualitative Research Method
【科目ナンバリング】 HFSWG6516
【担当教員】 松木 洋人
【授業形態】 講義、演習
【単位数】 2単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

質的データを収集、分析し、その成果を論文にまとめ上げるというプロセスは、決まった正解があるものではないが、そのプロセスの結果としてどれくらい価値のある研究成果が生み出されるかどうかは、質的研究の方法や論理をどれくらい理解しているかどうか大きく左右される。この授業では、社会学的な質的研究の成果を検討すること、さらには、簡単な質的研究を実践することを通じて、この方法と論理についての理解を深めることを目的とする。具体的には、国内外における重要な質的研究を対象として、受講者による報告・ディスカッションを行った後、受講者各自の関心に応じて質的データを収集、分析して、その成果報告を行うことを予定している。

【授業の到達目標】

質的研究の方法と論理についての概括的な理解を得ること。

【授業内容・授業計画】

1. オリエンテーション (授業の目的と進め方の確認) 1回
2. 講義：質的研究の論理と方法 2回
3. 文献購読：質的研究の実例の検討 8回
4. 演習1：質的データを収集する 2回
5. 演習2：質的データの分析結果を報告する 2回

【事前・事後学習の内容】

毎回の授業で、指定文献の読解など、予習・復習課題を指示する。

【評価方法】

授業への参加・貢献度 (50%)、期末レポート (50%)

【教材】

以下の書籍を参考書とする。

前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆編 (2016) 『最強の社会調査入門：これから質的調査をはじめの人のために』ナカニシヤ出版。

その他の参考書等は、受講者の関心も考慮したうえで、授業の中で適宜、指示する。

【受講生へのコメント】

文献の輪読を中心に展開される授業なので、事前に対象文献を精読することと積極的にディスカッションに参加することが必要となります。

【開講年度・学期】 2017 年度・a（昼間クラス）前期 b（夜間クラス）前期
【科目名】 権利擁護実践特論
【英語表記】 Advanced Theory and Practice of Social Work Advocacy
【科目ナンバリング】 HFSWG6517
【担当教員】 鵜浦 直子
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

社会福祉の制度・政策、実践の根底には「権利擁護」の視点がなくてはならない。近年の社会福祉をめぐる権利擁護の現状と課題を理解するとともに、社会福祉における権利擁護の概念についての理解を深める。そして、ソーシャルワークにおけるアドボカシー、判断能力が不十分な人への決定に関する支援など権利擁護のための実践方法や成年後見制度などの社会資源の活用のあり方などを理解する。

【授業の到達目標】

近年の社会福祉の権利擁護をめぐる現状と課題の理解を踏まえ、受講生一人ひとりが社会福祉における権利擁護とは何かをつかむこと。また、それに基づく具体的な権利擁護のための実践方法や制度のあり方を考えること。

【授業内容・授業計画】

1. 社会福祉をめぐる権利擁護の現状と課題（1回）
2. 社会福祉における権利擁護とは何か（1回）
3. ソーシャルワークにおけるアドボカシー（2回）
4. 判断能力が不十分な人の決定に関する支援（4回）
5. 判断能力が不十分な人の決定と成年後見制度（4回）
6. 地域生活と権利擁護（2回）
7. まとめ（1回）

【事前・事後学習の内容】

文献等を用いてディスカッションによる講義となるため、指示する文献等を読みこんでくること。文献等については、毎回の授業時に指示する。

【評価方法】

出席と参加態度、課題発表内容、レポートによる総合評価

【教材】

テキストおよび参考文献は、開講時に指示する。

【受講生へのコメント】

社会福祉に関する基本的な知識と積極的な参加を求めます。また、課題発表があるため、事前準備が必要です。

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 後期 b (夜間クラス) 後期
【科目名】 子ども家庭福祉特論
【英語表記】 Advanced Theory and Practice of Child and Family Services
【科目ナンバリング】 HFSWG6518
【担当教員】 中島 尚美
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

近年、子ども・家庭をとりまく福祉ニーズは多様化し、従来の社会的養護や保育、非行や障害等の保護的な制度政策の見直しが図られ、すべての子どものウェルビーイングを実現すべく、支援の強化や事業の拡充が行われている。本講義では、子ども家庭福祉の動向を踏まえて、支援体制としての法体系を理解したうえで、実践現場に求められている支援について事例を通して理解を深めていくことを目的とする。

【授業の到達目標】

子ども家庭福祉の理念を踏まえ、動向を掴みながら、実践現場にはどのような支援が求められているのかを考察する力を養うことを目標とする。

【授業内容・授業計画】

1. ガイダンス
2. 子ども家庭福祉の動向 (2 回)
3. 子ども家庭福祉の法体系 (1 回)
4. 子ども家庭福祉の支援政策 (2 回)
5. 地域の子育て支援の実際 (3 回)
6. 社会的養護体制と支援の実際 (3 回)
7. ひとり親家庭支援の実際 (2 回)
8. まとめ

【事前・事後学習の内容】

各授業内容に即応した事前学習内容のポイントを明らかにし、文献や資料についても伝える。事後学習においては、授業の振り返りを中心として課題を提示する。

【評価方法】

レポート (50%)、課題発表内容 (30%)、出席と参加態度 (20%)

【教材】

参考文献の提示、及び資料を配布するほか、適宜指示する。

【受講生へのコメント】

講義とディスカッションを中心として展開します。後半は、事例を用いての検討を行います。自らの課題意識を明確にして臨んでいただくことを願います。

【開講年度・学期】 2017 年度・前期集中
【科目名】 リハビリテーション特論
【英語表記】 Advanced Seminar on Rehabilitation
【科目ナンバリング】 HFSWG6519
【担当教員】 松本 一生（非常勤講師）
【授業形態】 講義
【単位数】 2 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

医学の観点から、高齢者や障害者のリハビリテーションを論じ、地域リハビリテーションおよび地域ケアの意義・現状を解説する。また、チームアプローチの意義や有用性を考え、そのあり方についてもディスカッションしていくこととする。

【授業の到達目標】

1. 医学の観点からのリハビリテーションについて説明することができる。
2. 地域リハビリテーションについて説明することができる。
3. 地域ケアについて説明することができる。
4. チームアプローチについて説明することができる。
5. 認知症ケアについて説明することができる。

【授業内容・授業計画】

1. 医学的リハビリテーションの概念と現状 (4回)
2. 地域リハビリテーションの展開と現状 (4回)
3. 地域リハビリテーションの事例研究 (3回)
4. チームアプローチの考え方 (2回)
5. 認知症ケアと地域ケアの考え方 (2回)

【事前・事後学習の内容】

講義で説明を行う。

【評価方法】

レポート 1回 100点

【教材】

適宜、プリントを配布する。

【受講生へのコメント】

医学的知識があまりなくても理解できるように工夫し、大学院生とさまざまな角度からディスカッションしていきたいと考えています。認知症ケアと地域ケア、家族介護に関心のある方にも受講していただけたらと考えています。

【開講年度・学期】 2017 年度・通年集中
【科目名】 前期特別研究
【英語表記】 Advanced Studies for Master's Course
【科目ナンバリング】 HFASM8501
【担当教員】 指導教員
【授業形態】 通年
【単位数】 10 単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

修士論文の作成を指導する。1 年次は、修士論文の研究課題を遂行するために必要な基礎理論、調査などの研究方法および分析方法に関する基本的な知識と技術の習得につとめる。このため、個々の院生の研究課題に対応した研究分野の関連専門書や先行研究などの文献資料の収集や講読を通じて、すでに解明された部分と未解明の部分把握でき、修士論文の研究課題をより明確することを目的とする。

2 年次は、修士論文の個別の研究課題に即し、内外の文献を渉猟するとともに、研究遂行のための調査研究を行う。これらの文献研究および調査の解析と考察、修士論文の構成と論述の方法に関して個々具体的に指導を行う。2 年次の前期に研究テーマの確定、また後期に中間発表を行い、修士論文の完成に向けて取り組む。

【授業の到達目標】

修士論文の作成に必要な知識と執筆能力を習得する。

【授業内容・授業計画】

1. 研究方法および分析方法の基本的知識、文献資料の探索
2. 研究課題の明確化および論文作成計画
3. 研究テーマの確定
4. 修士論文の構成に関する検討
- 5～15. 文献研究および調査研究の解析・考察及び執筆指導

【事前・事後学習の内容】

各講義の最後に各自が取り組むべき事後学習と事前学習の内容について指導する。

【評価方法】

主査および副査による修士論文の総合的評価

【受講生へのコメント】

研究課題の明確化に向けて、また研究課題の分野での学術レベルを知るべく、学生自ら積極的に内外の文献資料を探索することが必要である。

全コース共通

【開講年度・学期】 2017 年度・a (昼間クラス) 前期 b (夜間クラス) 前期
【科目名】 生活科学論ゼミナール
【英語表記】 Seminar on Human Life Science
【科目ナンバリング】 HHLS6501
【担当教員】 西川禎一 ほか
【授業形態】 ゼミナール
【単位数】 2 単位 (1 年次必修)
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

現代の世界における人々の生活と取り巻く課題をどう見るか。私たちが暮らす日本の生活と課題をどう見るのか。そして地球市民として世界と日本の生活を考えるとき、私たちはどのように暮らし行動すべきなのか。この明白な単一解を見出しえない命題について、食・健康科学、居住環境学、総合福祉・心理臨床科学の3つの専門分野の大学院生と教員が議論し模索する。このプロセスを通じて、各人がそれぞれの視座を確立し、専門に安住せず、多様な視点を有する人材と協働しながら生活課題に対して挑戦し続けることのできる基盤を形成する。

【授業の到達目標】

主題を理解し、実践する際に応用可能な知識、スキルとして定着させる

【授業内容・授業計画】

授業日程表は第1回の講義時に通知するが、昼間開講コースは4/17, 5/8, 5/22, 6/5, 6/19, 7/3, 7/10, 7/31、夜間開講コースは4/11, 4/25, 5/9, 5/23, 6/6, 6/27, 7/11, 7/25の予定

第2～7回は全て講義と演習からなる。

第1回	研究不正防止・研究倫理について (研究科長)・生活科学論ゼミナール概論 (西川)	(2コマ)
第2回	生活科学と食環境 (西川・安井)	(2コマ)
第3回	栄養学の外から見た食の効用と生活科学への応用 (山本雅之・葩島)	(2コマ)
第4回	生活科学と居住空間デザイン (小池)	(2コマ)
第5回	超高齢社会における生活科学を考える (篠田)	(2コマ)
第6回	2040年の少子高齢・人口減少社会を想定する (岩間)	(2コマ)
第7回	地震と住まい (渡部)	(2コマ)
第8回	ゼミナールのまとめ (西川)	(1コマ)

【事前・事後学習の内容】

毎回の授業で指示する

【評価方法】

授業中の質疑応答とレポート

【教材】

課題図書リストと資料を配布する

【受講生へのコメント】

“生活科学とは何か”について学修することにより、個々の研究に生活科学の視座を持ち、地球市民として思考を巡らせながら地域で活動するAdvanced QOL promoterを目指してください。

【開講年度・学期】 2017年度・後期集中
【科目名】 生活応用統計学特論
【英語表記】 Advanced Statistics and Its Applications for Human Life
【科目ナンバリング】 HHLS6502
【担当教員】 永村 一雄・佐伯 茂
【授業形態】 講義
【単位数】 2単位
【当学科・コース学生以外の受講】 可

【科目の主題】

居住生活の諸問題に統計学の知識を活かそうとすると、適用するための方法論とそれを運用する技量が必要となる。これらの基礎は、学部で履修することになっている。本特論は、応用や適用の実際を意識して、用いる方法論の本質的な理解を行い、運用の適否を判断できる能力を養う。

【授業の到達目標】

下記4項目の概念的理解を達成目標とし、口頭試問でそれを確認する。
基本統計量の内容、回帰の論理、検定の構造、ベイズ統計学の初歩

【授業内容・授業計画】

たんなる手段の解説や操作の教授は一切行わない。あくまで、運用の理解に徹する。そのため、適切な題材を対象に、討論形式で講義を進める。発表の時間と、黒板を使った解析の説明などを院生自身で体験してもらう。内容は主に以下の構成である。

1. 基本統計量の性質と意味—平均と期待値は違う!?
2. 統計的検定の枠組—結果を恣意的に操作できる!?
3. 回帰問題の本質—残差の性質と診断
4. 多変量への拡張
5. 計量尺度への拡張

【事前・事後学習の内容】

配布資料を講義までに読んでおくこと。講義終了後は復習すること。

【評価方法】

毎回出席し、討論に参加すること。また、事例を用いた演習を課す。両者を総合して評価する。

【教材】

毎回、資料を配布。

【受講生へのコメント】

記憶ではなく、理解する、という意味を実感するために、この講義を行う。積極的に参加されたし。

【開講年度・学期】 2017年度・前期集中
 【科目名】 国際科学コミュニケーション
 【英語表記】 Global Scientific Communication
 【科目ナンバリング】 HHLS7501
 【担当教員】 ファーナム クレイグ・早見 直美
 【授業形態】 演習
 【単位数】 2単位
 【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

Course is a concentrated course over 4 days, with breaks between to allow students to prepare writing and oral presentation assignments.

【授業の到達目標】

To help graduate students write clear English-language research papers and present at English-language conferences.

【授業内容・授業計画】

This course will be conducted in English. Japanese-language consultation is available during office hours.

Each theme will start with written practice and oral practice of key phrases. Then, each student will do the complete oral presentation task, receive feedback from instructors and other students, and repeat the task with improvement.

Theme	Hours	Written work	Hours	Presentation practice
Research summary and background	2	Literature review Defining specialist terms	2	Self-introduction 1-minute summary of research for general/ for specialists
Describing processes	2	Describe a scientific process Describe an experimental procedure	2	Presentation basics 3-minute presentation of experiment or process
Data, Graphs and Charts	2	Explain numerical data Explain equations Explain charts	2	5-minute presentation of results or data
Discussion and conclusions	2	Make conclusions based on data Explain results in context of previous knowledge and expectations Explain unusual results Explain significance of results	3	5-minute presentation of results with conclusions and discussion
Question & Answer	2	Answering a peer review Most likely questions Responses for difficult questions	2	Answer questions Answer difficult questions Pose questions
Final presentation		2-page (A4) presentation outline	3	Each student gives 9 minute presentation with 5 minute question and answer

【事前・事後学習の内容】

Self-study and at-home oral practice is required.

【評価方法】

Class participation (40%) Writing assignments (30%)

Oral presentation assignments (30%)

【教材】

Some handouts from the instructors. Each student's individual research material and papers.

【受講生へのコメント】

Basic literacy with word processing, spreadsheet and presentation software (such as MS

後期博士課程

【開講年度・学期】 2017年度・通年集中
【科目名】 後期特別研究
【英語表記】 Advanced Studies for Doctor's Course
【科目ナンバリング】 HDASD8601
【担当教員】 指導教員
【授業形態】 通年
【単位数】 10単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

博士学位論文の研究課題遂行のための基礎となる理論、実験について体系的な知識・技術の修得と研究成果のまとめを目的とする。

【授業の到達目標】

主題を理解し、実践する際に応用可能な知識、スキルとして定着させる

【授業内容・授業計画】

院生それぞれに対し、研究分野に関連する学術論文の精読、研究課題の設定、研究計画の立案、実験指導等を行い、博士学位論文の完成に導く。あわせて「ゼミ形式」により各専門分野に関わる最新の研究成果の理解、把握を徹底させる。研究成果の学会発表、学術論文誌への原稿作成・投稿についても指導する。

1. 研究分野に関連する学術論文の精読
2. 研究課題の設定
3. 研究計画の立案
4. 研究実験
5. 研究成果の発表

【事前・事後学習の内容】

毎回の授業で指示する

【評価方法】

博士論文の内容、公聴会での研究発表を通して総合的に評価する。

【教材】

【受講生へのコメント】

居住環境学コース

【開講年度・学期】 2017年度・通年集中
【科目名】 後期特別研究
【英語表記】 Advanced Studies for Doctor's Course
【科目ナンバリング】 HEASD8601
【担当教員】 指導教員
【授業形態】 通年
【単位数】 10単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

1年次は関連分野の研究成果を系統的に再整理し、学位論文の構成について検討する。また、はじめの副論文の作成を計画し、学会誌などへの投稿を計画する。2年次は学会誌などへの副論文の投稿を進め、学位論文作成の計画を具体化する。これらの過程を通して、研究の発展過程や学术论文の倫理性、実証性を学ぶ。3年次は投稿した副論文などを主要構成要素として、学位論文の作成を行う。

【授業の到達目標】

博士論文の研究課題遂行のための基礎となる理論、調査、実験などの研究方法や分析方法についての体系的な知識・技術の修得、および研究者としての能力を高めることを目的とする。

【授業内容・授業計画】

1. 研究方法、関連する知識・技術の修得
2. 研究計画の立案
3. 実験・調査等の実施と解析
4. 副論文の作成と投稿
5. 博士論文の作成

【事前・事後学習の内容】

配布資料を講義までに読んでおくこと。講義終了後は復習すること。

【評価方法】

日々の研究の進捗状況、副論文の内容、博士論文の内容、公聴会でのプレゼンテーション等を通して総合的に評価する。

【教材】

【受講生へのコメント】

総合福祉科学コース

【開講年度・学期】 2017年度・通年集中
【科目名】 後期特別研究
【英語表記】 Advanced Studies for Doctor's Course
【科目ナンバリング】 HFASD8601
【担当教員】 指導教員
【授業形態】 通年
【単位数】 10単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

博士学位論文の作成を指導する。1年次は、これまでの研究成果をふまえて系統的発展を促し、研究課題を設定する。研究課題に関する文献収集と講読を行い、関連する調査等を含め、博士論文の中核となる認定論文の作成を計画立てる。

2年次は、計画に基づいて研究を継続し、学会発表や学会誌等への投稿に向けた指導を計画的に行う。

3年次は、博士申請論文の具体的な執筆に向け取り組む。継続的な指導により、博士論文の完成を目指す。

【授業の到達目標】

博士論文の作成に必要な知識と執筆能力を習得する。

【授業内容・授業計画】

1. 研究課題の明確化
2. 論文作成計画
3. 学会発表や学会誌への投稿に向けた取り組み
- 4～15. 博士論文の執筆に向けた指導

【事前・事後学習の内容】

各講義の最後に各自が取り組むべき事後学習と事前学習の内容について指導する。

【評価方法】

博士論文の内容、公聴会での研究発表を通して総合的に評価する。

【受講生へのコメント】

博士論文の申請には、学術雑誌等への論文掲載が条件となる。したがって、学生自らが学会発表や学会誌への投稿など積極的な研究姿勢をもち、自らの学術的能力を高めるべく自己研鑽に努めることが大切である。

臨床心理学コース

【開講年度・学期】 2017年度・通年集中
【科目名】 後期特別研究
【英語表記】 Advanced Studies for Doctor's Course
【科目ナンバリング】 HGASD8601
【担当教員】 指導教員
【授業形態】
【単位数】 10単位
【当学科・コース学生以外の受講】 不可

【科目の主題】

博士論文作成のための理論的、技法的指導を系統的に行う。指導内容は、理論的展望によるオリジナルなテーマの選定、調査法の精緻化、実証データの演繹と独自の理論化となる。

1年次～2年次には、主に先行研究の展望を徹底的に行い、独自のテーマを設定していく。このテーマに関して、妥当な方法論の研究を行い、1年次後半にパイロットスタディを終了し、方法論の修正・検討を加える。修士論文で執筆した内容およびそれを進展させたものを学会で発表したり学会誌へ投稿したりする。その際、指導教員から入念な指導を仰ぐ。

3年次には、前述した論文および研究資料から演繹した独自の理論をもとに学会発表と学会誌への投稿に専念する。先行文献との関連から独自性を再評価し、科学的なオリジナリティを有する論文として章立て、内容に関する指導を行う。こうした課題を達成していくプロセスにおいて博士論文の完成を目指す。

【授業の到達目標】

最終の到達目標は学位論文の提出であるが、それに到る目標は専門学会誌等における（レフり付きの）学術論文の投稿と掲載である。学術論文作成の目安は、3～4本である。

【授業内容・授業計画】

1. 研究課題の明確化
2. 論文作成計画の精緻化
3. 学会発表の準備と実施
4. 大学・研究所紀要や専門学会誌への投稿準備と実施
5. 学会誌への掲載論文を中心とする博士論文の全体構成

【事前・事後学習の内容】

学会論文については査読委員会からの評価があるので、その評価に基づいて論文の形式・内容について事後学習が不可欠となる。それは同時に、学位論文に向けての事前学習となる。

【評価方法】

博士論文、博士論文審査会でのプレゼンテーション、学位論文の公聴会をもって評価する。

【教材】

【受講生へのコメント】

博士論文の申請には、専門学会誌への掲載が必須条件となる。そのため、日頃、真摯に研究に取り組み、一本でも多く、専門学会での発表を行えるように心がけて頂きたい。